

西洋中世学会 第 13 回大会 (2021 年)

自由論題報告要旨

1 阿部晃平 Kouhei ABE

知識をいかに体系づけるか？—9世紀のヴァランシエンヌ写本—

初期中世における学問区分論、すなわち哲学に属する個々の学問の定義およびその分類の理論は、プラトン/アリストテレスの衣鉢を間接的に継ぐカッシオドルス (485 頃～585 頃) やイシドルス (560 頃～636 頃) による、ある種の「百科全書」的な著作から主として引き写されていたことは、すでに多くの論者によって繰り返し述べられてきた。他方で、9世紀初頭から12世紀頃にかけて、オリゲネス (185 頃～254 頃) とヨハネス・カッシアヌス (360 頃～435 頃) という2人の教父からの引用に基づく分類理論が筆写された写本の存在が、かねてより古文書学者らによって指摘されている。しかし、これらの写本は未校訂のものも多く、未だ十分な検討が為されているとは言い難い。そこで、本報告ではそのうちの一つであるヴァランシエンヌ写本 (Valenciennes, Bibliothèque Municipale 404, s. IX) を主に検討していく。

当代の学問論を論じた写本の特徴として、「区分図」stemmataがテキストとともに描かれていることが挙げられる。これらの図はテキストの理解を助け内容を記憶するための視覚的な補助手段 (あるいはテキストの代替) として用いられており、例えば、9世紀以降広く読まれたカッシオドルスの『聖俗学問綱要』*Institutiones divinarum et saecularium litterarum* やアルクインの『弁証論』*De dialectica*、『修辞学と徳の対話』*Disputatio de rhetorica et virtutibus* の末尾などにも多数の図像が認められる。ヴァランシエンヌ写本にも同様にいくつかの区分図が描かれているが、この写本においては、伝統的なギリシア的区分図の周囲に教父のテキストが配されつつ、また同時に教父由来の理論も筆写されており、複数の「権威」による学問区分を視覚的に調和させようとする意図が見て取れる。

学問の分類を巡る議論は、「12世紀ルネサンス」によるアリストテレスの復活とアラビアの学問体系の流入、および大学の学芸学部におけるカリキュラムの整備と相まって、13世紀以降非常に活発化し、相対的に研究者からの関心も高い。しかし、本報告で取り上げる理論は、写本の分布から推察する限り、それ以前の時代において知られていたものであり、その淵源はいわゆる「カロリング・ルネサンス」に求められるだろう。カール大帝は、各修道院や司教座学校において教育、とりわけ聖書の正しき理解に資する文法学や比喩解釈に関する知識の涵養を求めた。本報告はヴァランシエンヌ写本を、カッシアヌスらによる四通りの聖書解釈をギリシア以来の伝統的な区分論に調和させる試みとして提示したい。

(立教大学大学院)

2 伊丹 聡一郎 Soichiro ITAMI

ノヴゴロド人河川賊「ウシクイニク」の活動から見る 14-15 世紀ロシアの諸状況

本報告において主に取り上げるのは中世ロシアのノヴゴロド人河川賊「ウシクイニク」の活動である。ウシクイニクとは、ロシアの年代記史料において 1320-1409 年間の記述に度々表れ、北はカレリア地方から南はカスピ海まで、広範な領域で活動した河川での海賊行為を働いた集団であった。彼らは多くの場合、北方のノヴゴロド領から船で南方へ移動して、主にヴォルガ水系の諸都市を襲撃・掠奪し、獲得した品物や奴隷をノヴゴロドまたは他の都市で売却することで収益を得ていた。また彼らの活動時期は、14 世紀以降急速に台頭してきたモスクワ大公国がノヴゴロド共和国との抗争を繰り広げていた時期と時を同じくしている。このことは、ウシクイニクの活動が 14-15 世紀ロシアにおける政治情勢とも密接に関係していたことも示している。

研究史上、上述のような前近代ロシアにおける河川を利用した移動・掠奪・交易は注目を集めてきた。広大なロシアの大地を網の目のように走る河川は、街道網が未発達であった前近代ロシアにおいて最も重要な交通手段の 1 つであったからである。とはいえ、先行研究は、河川がロシアの発展に重要な役割を果たしたことを指摘しつつも、その関心を、キエフ期 (9-13 世紀) のノヴゴロドからコンスタンティノーブルに至る南北の交易路—いわゆる「ヴァリャーギからグレキへの道」—を巡る議論に集中してきた。

それ故か、本報告の主題であるウシクイニクの活動についても、先行研究における議論は十分ではない。確かに先行研究の多くは、その活動が 14-15 世紀ロシアにおける政治情勢や河川交易の実態を見る上で重要な現象であることを示唆している。とはいえ先行研究においては、ウシクイニクがモスクワ系年代記で否定的に、ノヴゴロド系年代記で好意的に描かれていることから、その活動へのノヴゴロドの関与が指摘されるに留まっている。それに対して、ウシクイニクの性質・内部構成、上述の河川交易やモスクワ＝ノヴゴロド抗争との関連性については、具体的な検討がほとんど為されてこなかった。

本報告では、以上のような研究状況を踏まえつつ、14 世紀より以前からノヴゴロド人がおこなってきた「掠奪行」とウシクイニクの遠征との比較と、上述のモスクワ＝ノヴゴロド抗争における両国の動向とウシクイニクの活動との関連性の検討を通して、ウシクイニクの活動の実態を明らかにすることを試みる。これらの検討に際しては、各種年代記史料や近年の考古学の成果を利用をする。これらの作業を通して、「掠奪行」と比べた際のウシクイニクの活動範囲や志向性における特異さと、その活動へのノヴゴロドの後援の程度が明らかになるであろう。これによりウシクイニクがモスクワ＝ノヴゴロド抗争にもたらした影響を解明することと、キエフ期ではなく 14-15 世紀における河川利用を検討することで、中世ロシアにおける河川を巡る研究に新しい視角をもたらすことが本報告の目的となる。

(明治大学大学院博士後期課程)

3 徳永聡子 Satoko TOKUNAGA

Oxford, MS Bodley 283 をめぐる書物ネットワーク—頭文字からの再考—

15 世紀中葉に登場した活版印刷術が、ヨーロッパの文化ならびに社会的変容に大きな影響を与えたことは言を俟たない。その一方で、ヨーロッパ書物文化から、一夜にして手書き写本の世界が消失したわけではなく、揺籃期の印刷本には中世写本からのさまざまな連続性が確認されている。また近年の書物史研究の発展にともない、写本／印刷という二項対立的な視点からの脱却が進み、中世写本から初期刊本を横断的に分析する事例研究も積み上がってきた。こうした研究動向を背景に、報告者は、15 世紀末イングランドにおける写本生産と印刷所の関係について検討を重ねている。本報告は、ロンドンとその周辺で制作された複数の写本と印刷本をマテリアリティの側面から検討し、それらに共通する特徴から、同時代の書物人たちのネットワークに新たな光を当てることを目的とする。

報告の中心に据えるのは、オックスフォード大学図書館が所蔵する MS Bodley 283 である。同写本は平信徒向けに罪の告白のために必要な知識をまとめた道徳の書である、中英語作品 *The Mirroure of the Worlde* を収録する。第四ラテラノ公会議後にドミニコ会士によって編纂されたコンピラティオを主要なソースとして仏語で書かれた *Le miroir de monde* と *Somme le roi* に依拠する。羊皮紙と紙の両方を用いて書かれ、冒頭には華やかな装飾ボーダーと装飾頭文字が施されている。また随所に単色インクで挿絵 (pen drawings) が描き込まれている。

写本学者 Kathleen Scott の研究により、MS Bodley 283 の初期所有者や、制作に携わった挿絵画家と装飾画家の仕事について、これまで多くのことが判明している。まず、写本は 1470 年代頃にロンドンの反物商 Thomas Kippyng が注文あるいは所有した可能性が高い。また装飾画家たちの仕事はこれ以外に少なくとも 5 点の写本に確認されている。さらに挿絵画家は、英国印刷の始祖ウィリアム・キャクストンが翻訳した中英語『寓意オウイディウス』の現存写本 (Cambridge, Magdalene College, MS F. 4. 34) の挿絵を手がけた、ネーデルラント出身の画家である。これらのことから Scott は、MS Bodley 283 の成立過程におけるキャクストンとの (間接的ながらも) 関連性を示唆してきた。

本報告では Scott の研究を基に、新たに MS Bodley 283 の彩色頭文字に注目してその考察を深めたい。装飾性を帯びない頭文字はその地味さゆえに写本・初期刊本研究でこれまでほとんど注目されてこなかった。しかし、同時期の写本と印刷本に手書き頭文字を辿り、それらに見出される共通項を古写本学、書誌学的な見地から検証すると、書物の成立過程を支えた書籍ネットワークが浮かび上がってくるのである。

(慶應義塾大学)

4 杉山美耶子 Miyako SUGIYAMA

ヤン・ファン・エイクと工房作《磔刑》《最後の審判》—骸骨の銘文を中心に—

ヤン・ファン・エイクと工房による《磔刑》《最後の審判》（1440-41年頃、ニューヨーク、メトロポリタン美術館）において、画家は顕微鏡のような観察眼を持って天と地の壮大なドラマを描き出している。一九世紀中頃の記録は中央に「マギの礼拝」が描かれていたと伝えているが、制作当初の構成に関しては明らかとなっていない。近年では《磔刑》に基づく逸名画家による素描が再発見され、また画枠及び銘文に関する科学調査が行われた結果、聖櫃、或いは聖遺物容器の翼部内側を構成していた可能性も提示されるなど、活発な議論が継続してなされている。元来の構成と機能に関する議論が再燃している近年の潮流に対し、本発表では作品の図像と記されたテキストに立ち返りその特異性を読み解いていきたい。

《磔刑》の十字架上のイエスは、苦悶の表情を浮かべ、今まさにその胸を槍で突かれ絶命の瞬間を迎えている。彼を取り囲む祭司や兵士たちの野卑な表情と、前景に集う聖母マリアをはじめとした一群の悲しみに打ちひしがれた表情が鮮やかな対照をなしている。《最後の審判》において、イエスは十字架上の死を乗り越え、世界の裁き人として再来した姿で描かれている。左右には慈愛のマントを広げる聖母マリアと洗礼者ヨハネが控え、更に諸天使、十二使徒と聖処女たち、教会世界の人々、王侯貴族が周囲を取り囲んでいる。この構成は、ファン・エイク兄弟による《ヘントの祭壇画》に描かれた万聖図の構図と比較し得るものである。しかしここでは、伝統的な「最後の審判」には見られない、特異な表現が認められる。それは大天使ミカエルを背に乗せ、地獄を覆うかのように四肢を広げる骸骨である。先行研究において《最後の審判》の骸骨表現は、地獄の上に君臨する死の象徴として言及されるに留まっていた。しかしながら、「最後の審判」においてミカエルは伝統的に天秤を持った姿で描かれることを考慮するならば、本作品における骸骨の表現を再考する必要があるだろう。

ここで鍵となるのは、骸骨が広げる翼に記された CHAOS MAGNV[M] / VMBRA MORTIS という銘文である。「大いなる深淵」と「死の影」と読まれるこれらの銘文は、H. ベルティングと D. アイヒベルガーをはじめとした先行研究において、聖書において冥界を意味する婉曲表現と捉えられ、具体的な典拠や記されている理由に関しては考察されてはこなかった。本発表では、これらの銘文がクレルヴォーの聖ベルナルドゥスによる、諸聖人の祝日の説教から引用されている可能性を指摘する。この説教は黙示録で語られているヨハネの幻視に関わるものであり、《最後の審判》の図像とも密接に関係するものである。骸骨の銘文が同説教から引用されているとするならば、本作品の図像は従来考えられてきた以上に極めて高度な神学的知識に基づき制作されたものであり、制作にあたって神学的助言者が関わっていた可能性も考えられるだろう。

（日本学術振興会特別研究員 PD）

5 村松 綾 Aya MURAMATSU

16世紀バーゼルの金工コレクション形成にみる交流と流通 —ニュルンベルク由来鑄造作品を中心に—

本報告は、16世紀のバーゼルの蒐集家一族アメルバッハ家の金工コレクションとニュルンベルクで活躍した彫金師ヴェンツェル・ヤムニッツァーの関わりを探ることを目的とする。

アメルバッハ・キャビネットと呼ばれるアメルバッハ家のコレクションは、祖父から孫の3代にわたって蓄積された、絵画や版画、素描から書籍や貨幣、金工の各部門から成る膨大なもので、孫のバーゼル大学法学部教授のバシリウス・アメルバッハ（1533-1591）の時代に完成したといわれている。金工部門のコレクションでは製作技術に興味を抱いたバシリウスが工房を丸ごと保存し、入手しやすい居住地の職人の作品から金工芸術の先進地域である南ドイツの作品に収集対象を広げていたことを2020年度の西洋中世学会第12回大会ポスター発表において報告した。本報告では、そこでは扱っていなかったニュルンベルク由来と考えられる精巧な鑄造原型がバーゼルまでやってきた経緯やバーゼルの彫金師の交友関係に注目する。また、コレクションの中でも有名な焼失原型によるトカゲの鑄造をバシリウスの父ポニファキウスが入手した経緯も不明である。

自然物を鑄造するアイデアは古代のデスマスクに由来するとされ、中世ヨーロッパでも死者崇拝にデスマスクが受け入れられた後、15世紀以降レアリスムと写実表現が勃興する中で再度脚光を浴び、イタリアで金属器の装飾として小動物の鑄造が一般的になってからドイツのニュルンベルクに伝わったとされている。16世紀の自然物鑄造に関する技法集がフランスやドイツに現存していることから、自然物鑄造の作品はヨーロッパ各地で作られていたと考えられるが、ドイツ語圏で特に有名なのがヴェンツェル・ヤムニッツァーであり、このポニファキウスのトカゲの鑄造物もヤムニッツァーの周辺で製作されたと考えられている。

本報告では、アメルバッハ3人の書簡集 *Die Amerbachkorrespondenz* を確認し、ポニファキウスらが彫金師やニュルンベルクの人々とどのような交流をとり得たか交友関係に考察を加える。次いで刊行されている遺産目録と財産目録における金工作品、可能であれば鑄造物に絞って分析を試みる。また、金工作品の入手は個人的なやりとりのみによるのか、高価なものでなければ定期市でも購入可能なのか、はっきりと断定した先行研究にはまだ出会っておらず、本報告ではこの点にも示唆を与えたい。流通網と取扱品目に関しても可能な範囲で考察を加える予定でいる。

(東京国立博物館 学芸企画部 アソシエイトフェロー)